

石井先生を送る

鳥居 正文

石井晴一先生が今年度末をもって本学専任教員の職を退かれる。

石井先生は、本学フランス文学科の〈顔〉として、文字どおり三面六臂の活躍をしてこられた。私にとって石井先生という人は次のような人である。

正面のお顔は言わずと知れたバルザシアンのそれ。先生のご専門について門外漢の私が語れることは何もないが、バルザック生誕二百年を記念して出版された『バルザックの世界』を一読しただけでも、石井先生が「バルザックが好きで好きでたまらない人」であることは判る。また「バルザックの隅々まで知り尽くしている人」であるらしいことも判る。こんなに好きな研究対象と学生時代に巡り合い、一生のテーマとされていることを羨ましくさえ思う。

バルザック学者に続く二つ目のお顔は、語学教育者としてのそれである。石井先生はNHK テレビ、ラジオのフランス語講座の講師を何年にも亘って務められたが、それは語学教育者としての先生の活動の一端が電波に乗ったにすぎない。語学重視は青山仏文の伝統であるが、その屋台骨を真中で支えてこられたのが他ならぬ石井先生であり、先生の真骨頂は一、二年生の教室での授業にあるとさえ言えるだろう。先生は口を酸っぱくして、語学の、それも特にその基本となる音声の重要性を力説されてきた。一時期、といっても何年にも亘って、石井先生がラテン語を勉強し直されていたことがあるが、その様子をそばで眺めていると、自らの手で丁寧にカードに書き写してこられたラテン語の文章を、繰り返し口の中で、あるいは声に出して発音されているではないか、まるで中学生が初めて英語を習う時のように。石井先生の語学学習の原点を見た思いがし、感銘を受けたことを覚えている。そういう意味では石井先生は身体を駆使する「肉体派の人」である（同時に「知性派の人」でもあることは言うまでもないが）。

石井先生の三つ目のお顔は翻訳者のそれである。バルザック（『ランジェ公爵夫人』、『谷間の百合』など）、フランク先生関係（『コレージュ・ド・フランス就任演説』、『風流と鬼』（共訳））、その他、いずれのご翻訳も彫心鑿骨の作品である。と、身のほど知らずにも断言できるのは、いくつかのお仕事に誘っていただき、常人には及びもつかない先生の、全神経を張り詰めてのお仕事振りに接する機会があったからである。石井先生の監修で日本の短編小説のフランス語訳『現代日本短編小説集』（全二巻、ガリマール社）が刊行されたことがあるが、これは先生のお仕事振りに共振するようにして、訳者（フランス人）と訳文校閲者（日本人）が、さながら Ishii et Compagnie（石井とその仲間たち、石井商会）となって作り出した作品である。「日仏翻訳文学賞」の選考委員会委員を長年務めていらっしゃるのも、「翻訳の重要さと大変さを人一倍分っている人」だからであろう。

石井先生の四つ目のお顔として——三面六臂では足りなくなるが——辞書編纂者のそれがある。このお仕事にも途中から参加させていただいたが、これも先生が文字どおり機関車役を果たされて完成にこぎつけたものである。石井先生にとって辞書が情熱を傾けるに足る対象であり得たのは、バルザック同様、石井先生も「活字に魅せられた人」であったこと、また石井先生が自覚せざる理想の辞書編纂者＝「文学者、語学教育者、翻訳者の三つの面を理想的なかたちで併せ持つ人」であったことによるのではないだろうか。

その他にも、日本フランス語フランス文学会の幹事長を務められるなど、先生の学外でのご活躍には目覚しいものがあるが、ここでは省略せざるを得ない。

学内、学科内における貢献もいちいち数え上げれば切りがない。その際立ったフランス語力で、毎回鋭い指摘をされた入試問題検討会議の場一つをとってみても、石井先生の欠落は容易には埋まらないだろうが、ここは先生のご健康とますますのご活躍を祈念しつつ、お送りするしかない。

（フランス文学科教授）